

吉備国際大学研究紀要

(人文・社会科学系)

第23号, 21-28, 2013

幼児教育現場における英語活動の実態とその方向性

秀 真一郎*・木本 有香**・中島 眞吾***・烏田 直哉****
小野 克志*****・志濃原 亜美*****・横井 一之****・田中 卓也*****

The realities and the directions of English education and activities in Early Childhood Education Fields

Shinichiro HIDE*, Yuka KIMOTO**, Shingo NAKASHIMA***
Naoya KARASUDA****, Katsushi ONO*****, Ami SHINOHARA*****
Kazuyuki YOKOI****, Takuya TANAKA*****

Abstract

This paper is aim to research the realities and the directions of English education and activities in Early Childhood Education Fields. Ministry of Education, Culture, Sports, Science & Technology officially announced a policy of the requirement about English education in Elementary school. Also, the societies and environment around early childhood infants are

-
- * 吉備国際大学心理学部
〒716-8508 岡山県高梁市伊賀町 8
Kibi International University
8, Iga-machi, Takahashi, Okayama, Japan (716-8508)
- ** 同朋大学社会福祉学部
〒453-8540 愛知県名古屋市中村区稲葉地町7-1
Doho University
7-1, Inabaji-cho, Nakamura-ku, Nagoya, Aichi, Japan (453-8540)
- *** 名古屋短期大学非常勤講師
〒470-1161 愛知県豊明市栄町武侍48
Nagoya College
48, Sakaemachitakeji, Toyoake, Aichi, Japan (470-1161)
- **** 東海学園大学人文学部
〒468-8514 愛知県名古屋市天白区中平二丁目901
Tokai Gakuen University
2-901, Nakahira, Tempaku-ku, Nagoya, Aichi, Japan (468-8514)
- ***** 名古屋文化学園保育専門学校
〒461-0011 愛知県名古屋市東区白壁一丁目54
Nagoya Bunka Gakuen Nursery and Kindergarten Teachers College
1-54, Shirakabe, Higashi-ku, Nagoya, Aichi, Japan (461-0011)
- ***** 秋草学園短期大学幼児教育学科
〒359-1112 埼玉県所沢市泉町1789
Akikusa Gakuen Junior College
1789, Izumi-cho, Tokorozawa, Saitama, Japan (359-1112)
- ***** 共栄大学教育学部
〒344-0051 埼玉県春日部市内牧4158
Kyoei University
4158, Uchimaki, Kasukabe, Saitama, Japan (344-0051)

changed a lot. These things are influenced the day care and education that early childhood education fields need to promote today. Therefore, many contents are offered children. However, English activities seem to see a different content in the daily day care and education. This paper is based on the interview to 14 directors of early childhood education fields about their English activities and education for children. Then, it is considered the directions how English education and activities in Early Childhood Education Fields should be.

Key words : Early Childhood Education, English education and activities, Communication, Play

キーワード：幼児教育，英語教育や英語活動，コミュニケーション，あそび

I. はじめに

現在，幼児教育現場を取り巻く状況は転換期を迎えようとしている。長きにわたる不況と女性の社会進出の波を受け，保育所に子どもを預けるために順番を待たなければならないという状態になっている。保育所の需要が伸びる中，日本の幼児教育の歴史の中核を担ってきた幼稚園の担う役割も変化してきている。延長保育という形を取り，通常時間の終了後に子ども達を預かることを行っている。この延長保育（預かり保育）はまさに幼児教育現場における，新たに始まった取り組みといえるであろう。

このような状況が幼保一元化に対する必要性を高めているともいえる。そして，認定こども園という幼児教育環境が現れ，さらに認定こども園法の改正が進められようとしている。ここでは，指導監督の一本化を図り，幼保連携型認定こども園が学校及び児童福祉施設という位置づけとし，既存の幼児教育現場形態において新たに加わろうとしている。そして，新たな幼保連携型認定こども園は，幼稚園と同様に小学校就学前の学校教育を行う学校であるとされ，小学校教育との連携・接続が必要であることを明確にしている。さらに，保育を必要とする満3歳以上の子どもに対しては，児童福祉の観点からくる保育と学校教育の両方を提供するとなっている。このことから，幼稚園と保育所の枠組みに対する考

え方に変化が生じてきていることがわかる。

以上のような流れからも，子ども達を取り巻く幼児教育環境に変化が表れている。このような変化は環境という面だけにとどまらず，子ども達自身における変化として見られるようになってきているともいえる。

子ども達においては，ものに溢れる環境が今やごく当たり前となっている。必要以上のものが常に周囲に存在する環境に育った子ども達においては，保育現場として提供する内容やその方法にも違いが生じてくる。そのため，子ども達自身に起こっている変化に対して，幼児教育現場としても変化に対する対応が迫られている。そして，子ども達の変化や社会の変化による，幼児教育現場に対するニーズが多様化してきている。

子どもの体力低下に対する取り組みとして体操教室やサッカー教室を保育内容に取り入れ，その他にも書道教室，絵画教室，鼓笛隊や和太鼓といった芸術分野にまで広がっている。そんな中，英語教室もまた幼児教育において特筆すべき活動として注目され，その活動は全国に広がってきている。

しかし，英語教育に対する注目は他の特筆活動と同じ価値としてとらえられている一方で，他の特筆活動と一線を引く形でとらえられてもいるようである。その背景には，文部科学省による小学校英語教育必修化があるのではないだろうか。この取り組み

を打ち出すことによって、幼児教育現場における英語教育の要望は増加の傾向にある。そして、その要望を受け、保育内容における英語教育の取り入れを行っている幼児教育現場は増加している。外国人講師を派遣する英会話教室経営のシェーンコーポレーションジャパン取締役の小野田浩己さんは「子供の数が減るなか、英語を教える園に幼児が集まる傾向があります」（幼稚園で英語「必修」のナゾ）と答えた。

日本において、「社会のグローバル化」、「国際社会に通用する人材の育成」など、世界に目を向ける潮流が勢いを増し、教育においてもその流れは無視できない状況となっている。幼稚園や保育所においては、小学校における「外国語活動」導入以前からすでに英語を教材や保育内容として取り入れ、園児に触れさせているところも多い。

幼児教育現場における英語教育に関する研究をみると、各園での実践、特に幼稚園について検討したものが多数を占める。例えば池中（2006）は幼稚園のカリキュラムの中での英語活動の位置づけや活動の意義を探っており、田中・古茂田（2007）は、幼稚園における英語教育の実践例について明らかにしている。福士・成田・坂本（2009）は、保育所まで含めた英語活動についての分析を行っている。こうした蓄積にも依拠しながら、幼児教育現場における英語教育の全国的な実態解明を最終目的とし、実態解明から幼児教育現場における英語教育・英語活動の今後の流れや方向性について考察していく。そこで本報告では、そのための予備調査としていくつかの実践例を示し、英語活動実施状況を含めた今後の動向について分析を行っていく。

II. 方法

本研究は、関東・東海・中国の各地方における都市部に在在する幼稚園・保育所14か所を対象に、そ

れぞれの所・園長へインタビューを行った。

インタビュー項目は以下のものとした。

- ① 実施対象年齢・回数・時間
- ② 講師の出身国および使用言語
- ③ 英語活動の開始時期およびきっかけ
- ④ 保育目標・保育方針とのかかわり
- ⑤ 講師の選定方法および理由
- ⑥ 英語活動内容の決定方法
- ⑦ 英語活動時の保育者の役割
- ⑧ 英語活動の時間以外における子どもと英語のかかわり
- ⑨ 英語活動に関する保護者からの意見等
- ⑩ 園側の不安、疑問、困っていることなど
- ⑪ 小学校での英語必修についての考え
- ⑫ 英語活動の内容

III. インタビューまとめ

今回のインタビューは8幼稚園ならびに6保育所によって実施した。インタビュー結果は以下のものとなった。

- ① 実施対象年齢・回数・時間

【実施対象年齢】 5歳児:14園, 4歳児:12園, 3歳児: 9園

【回数】 月2回: 5園, 週1回: 5園, 以下は1園ずつ: 週5回, 週2回, 月1回, 随時

【時間】 30分: 6園, 15分・20分: 2園ずつ, 以下は1園ずつ: 45分, 40分, 25分, 随時

- ② 講師の出身国および使用言語

【出身国(複数回答あり)】アメリカ・オーストラリア: 3園ずつ, イギリス・フィリピン: 2園ずつ, 以下は1園ずつ: 日本, ニジェール, ナイジェリア, 英語圏, 不明

【使用言語】 英語: 13, 日本語: 2, フランス語: 1, 中国語: 1, ニジェール語: 1

③ 英語活動の開始時期およびきっかけ

【開始時期】10年前：4園，12年前：2園，1年前：2園，以下1園ずつ：45年前，30年以上，15年未満，8年前

【きっかけ】園長の個人的経験と必要性を感じたことから：4園，国際化の対応や異文化への親しみのため：3園，特色づくりなど：3園，保護者の要望：2園

④ 保育目標・保育方針とのかかわり

経験を通しての教育：5園，子どもの自立や主体性を育てる一環：4園，国際化に対する順応：2園，以下1園ずつ：小学校の予備教育，英会話の重要性

⑤ 講師の選定方法および理由

【選定方法】業者委託：9園，独自募集：4園，大学と共同活動：1園

【理由】テレビインタビューを見ての直感，様々な講師派遣を一手に委託，地域密着業者だから，長年の流れ，卒園児の保護者など

⑥ 英語活動内容の決定方法

業者・講師に完全お任せ：9園，業者・講師にお任せ+園側との打ち合わせ：3園

⑦ 英語活動時の保育者の役割

一緒に活動の中で子どものサポート：14園

⑧ 英語活動の時間以外における子どもと英語のかかわり

ほとんどなし：3園，行事による発表：3園，日常化・生活の一部：3園，課外の英語活動実施（希望者）：2園，担任による活動内容の自然な形での反復：2園

⑨ 英語活動に関する保護者からの意見等

賛成意見：13園，保育所での英語活動に驚き：1園，全員対象に違和感：1園

⑩ 園側の不安，疑問，困っていることなど

全員活動に対する懸念，担任の英語力や英語に対するプレッシャー，英語講師の育成，英語活動の将来性や方向性，教育的効果

⑪ 小学校での英語必修についての考え

英語であることの必然性に対する疑問，いい経験，何かしらの安心感，幅広い人間性を培う工夫，文部科学省の対応の遅さに憤り

⑫ 英語活動の内容

ピクチャーカード・フラッシュカード・視覚的教材・ゲームの活用，天気・日付・曜日・挨拶・数・色・乗物・食べ物等を内容として使用

IV. 考察

英語教育・英語活動の実施状況

今回のインタビューにおいて，インタビューを実施した幼児教育現場は，いずれも私立の幼稚園・保育所であった。よって，公立幼稚園・保育所における英語活動の取り入れ状況も含めたインタビュー結果ではないため，平均的な英語活動実施状況と言えない点もある。しかし，幼児教育現場での英語活動は積極的に行われているということが読み取ることができる。さらに対象年齢では3・4・5歳に対して実施しているところがほとんどであり，幼児からの活動開始が適切という認識が持たれているようであった。

中には2歳から始めても早すぎることはないという回答もあった。この回答には，インタビュー対象者である園長の個人的経験からくるものが強いとさ

れ、その経験に基づいた活動状況へと繋がっていると推察される。

実施回数では、月2回もしくは週1回という回答が最も多く、英語活動に対する捉え方が日常に即したというよりも、数ある経験の一つとしながら、子ども達への定着の期待がうかがえた。その反面、週5回や随時といった日々の生活との密接な関係を望むような取り組み方法を取っている園も存在していた。このことから、幼児教育現場における英語教育・英語活動の実施には、それぞれに大きな差が生じていることがわかる。英語とのかかわりを、経験とするか日常とするかではその差は歴然としたものとなるが、継続性に関する懸念はぬぐいきれない。

実施時間においても様々である。幼児期の活動時間に準ずる時間の設定がなされていて、やはりここでも無理なく楽しい経験という位置づけがうかがえた。活動時間の平均は約30分となっている。ここには随時という回答は含まれておらず、時間的区切りを持つことと持たないことで、経験という位置づけと日常という位置づけとに分かれると考えられる。

英語活動実施に伴う環境

講師の出身国と使用言語については、特に偏りは見られず、英語を主言語とする国の出身者もいれば、多言語を日常的に使う国の出身者もいる。講師の個性や特技を生かした活動の期待をする園も存在した。しかし、採用にあたっては斡旋業者への委託にもあるように、講師に関する独自の基準がないようにも見える。

英語活動の開始時期では、開園時期によっても違いがあるが、10年から12年前という回答が最も多い。しかし中には、45年や30年前という回答もあり、英語活動の継続性が明らかとなった。ここで注目すべき点は、1年前という回答がたったの2園という点である。小学校における英語必修化が実施されたのは1年前である。このことから、今回インタビュー

を行った幼稚園・保育所において、小学校のカリキュラム変遷の影響をそのまま受けた園は少ないと言える。そして、幼児教育現場では英語に対する着目はずいぶん前にあり、それらは小学校英語必修化とは一線を引くことができるのではないかと予想される。

きっかけにおけるインタビューの回答を見ると、英語活動の開始時期での考察が正しいものであることがわかる。きっかけにおいては、園長個人の考えが主だったものと言えるが、異文化理解や国際化への対応といった子ども達の将来に役立つ機会の提供も見られた。一方、保護者の要望や園の特色づくりといった運営に基づく理由もあった。このことから、英語活動の取り入れには、社会の流れやニーズを加味しながらも、それぞれの教育課程や保育課程に沿った形での取り入れと読み取ることができる。

英語活動と実施園とのつながり

保育目標・保育方針とのかかわりでは、きっかけにおける回答からもわかるように、それぞれの園の掲げるものに準ずるかたちがとられていた。英語活動の取り入れに対して、保護者の要望の鵜呑みや安易な特色づけの一環ということではないということがわかる。

講師の選定方法としては、先述したように斡旋業者への委託がほとんどを占める中、独自募集を行っているところもあった。斡旋業者へ委託する中で、それぞれの園による要望や講師に対する理想像は斡旋業者に対して要望を出しているところがある。このことから、各園における保育目標や教育方針等とのかかわりが保たれているということがうかがえる。独自の募集を行っている園においては、英語活動の位置づけが、日々の教育・保育の中で高いものと見受けられ、活動の形態や講師の役割においても他のものと違いがあるように思われる。

活動内容の決定では講師や業者に委ねるところが

大半を占め、その中で少数が園として若干の関与を示していた。これに関しては、英語活動の取り入れに対しては各園の考え方がはっきりとしているものの、実際の活動内容に関してのかかわりが薄いと感じる結果となった。これは英語活動に対する知識や情報の不足が原因ではないかと推測でき、英語活動を日々の活動の一部として位置付けていないことの表れではないかと考えられる。

活動中の保育者は、活動内容の決定の結果からもわかるように、活動における子ども達のサポート的役割に必然性を感じる。そのため、保育者自身が活動内容における認知がどの程度あるのかに関しては不明であり、担当する子ども達と活動内容の間に立って繋ぎとめる役割や、活動内容へ誘い入れる役割と想像される。

時間外での子どもの英語とのかかわりでは、その様子は様々で、日々の保育・教育の中で実際に行ってみたり、歌やリズム遊びに取り入れるといった積極的なかかわりの設定もあれば、生活発表会や英語活動発表会といった行事への取り入れを行い、英語活動におけるある一定の成果を期待する動きもみられる。しかしその一方で、前述のような活動や行事の取り入れを行わず、時間外での子どもと英語のかかわりがほとんどないという回答もあった。

幼児教育現場における英語活動と様々な要素の関係

保護者からの意見等では、賛成意見が13園と英語活動に対して好印象が持たれていることがわかったが、英語活動に関してマイナスの印象が全くないという現れとは言い難い。この回答に対しては、活動に対する印象や認識の度合いが各保護者によって違うのではないかと考えられる。

英語活動に対する園側の不安、疑問などにおいて、各園の英語活動の実情からの回答が多くみられた。その中でも代表的なものが、「実際に実施しているがその教育的効果に対する不安感」であり、実際に

英語活動を実施している幼児教育現場において、多くが抱えているものではないだろうか。それは、実際に実施している英語活動の将来性や方向性に対する疑問という形でも現れている。この英語活動の将来性や方向性こそ、本来実施する上で見据えておかなければならない“ねらい”であったり、“目的”という形で現れるべきものである。しかし、ここに対する不安や疑問の解決こそ、今幼児教育現場における英語活動において取り組むべき点だと考える。

小学校の必修については様々な意見があるものの、幼児教育現場で英語活動を実施する側としての連動性や関連性に関して、意識した回答ではないように感じた。回答内容に関して、いい経験や安心感といったものから、幅広い人間性を培う工夫の必要性や英語そのものの必然性に対して疑問を持たれている回答もあった。このことから、幼児教育現場における小学校での英語必修化は、日々の保育・教育に対してその内容が大きく変わるほどの捉え方をしていないと見られる。もしくは、意識しているが、どのように連動や関連付けることができるのか模索していると受け取れる。さらには、どのように関連付けるべきかわからないということから、英語そのものの必然性に対する疑問という形で現れているのではと推測される。

実際の英語活動内容は、英語の習得というよりも英語との出会いや楽しさに対する経験という捉え方ができる内容ではないかと考える。そのため、ピクチャーカードやフラッシュカードなど視覚的教材を使い、子ども達により親しみやすい方法が取り入れられている。また、歌やリズムなど聴覚的教材を使用し、子ども達の日常に添った内容を題材としている。英語活動内容の詳細においては、やはり子ども達の日常に即したものとなっており、日常保育においても、子ども達自身が自らの経験と英語を結び付けやすくすることが可能と考える。事例としては以下のようなものとなる。

活動テーマと内容事例

| |
|--|
| Colors (色) Red, Yellow, Blue, Green, Pink, Orange, White, Purple, Black, Grey, Gold, Silver, Bronze |
| Numbers (数字) One, Two, Three, Four, Five, Six, Seven, Eight, Nine, Ten, Eleven, Twelve, Thirteen... |
| Animals (生き物) Dog, Cat, Mouse, Rabbit, Monkey, Elephant, Horse, Cow, Pig, Tiger, Lion, Rabbit, Fish, Frog, Caterpillar, Turtle, Snail, Beetle, Spider, Snake, Duck, Chick |
| Feeling (感情) Happy, Sad, Angry, Sleepy, Thirsty, Hungry, Tired |
| Body Parts (体の部分) Head, Shoulders, Knees Toes, Eyes, Ears, Mouth, Nose, Hands, Arms, Feet, Elbows, Fingers, Nails, Stomach |
| Shapes (形) Circle, Triangle, Square, Star, Hear |
| Foods (食べ物) Apple, Orange, Strawberry, Banana, Peach, Watermelon, Tomato, Potato, Carrot, Corn, Cucumber, Pumpkin, Eggplant, Onion |
| Actions (アクション) Jump, Stop, Walk, Jog, Hop, Run, Clap, Dance, Slow, Fast |

V. まとめ

今回のインタビュー調査では、現在の幼児教育現場における英語活動についての実態や捉え方が明らかとなった。しかし、これはあくまでも小規模調査による結果であることから、調査の継続および情報の収集に取り組む必要があると考える。

幼児教育現場における、英語活動・英語教育の方向性

幼児教育現場における英語活動や英語教育は、その歴史が古いこともわかってきた。しかし、その起源や取り組みの取り入れにおける目的ははっきりしない。そのためか、地域性や個々の幼稚園・保育所によって英語活動や英語教育の取り入れ方に差が生じている。幼児教育期の子どもは、物事に対する捉え方が柔軟で、あらゆることに対する吸収力は目を見張るものがある。このことに注目するのであるならば、英語教育においても、まず自らの話す母語と比較することで違いを知るきっかけとなる。違いを知り、違いを楽しむ。新たな発見から子ども自身の持つ探究心や好奇心をさらに掻き立てる。幼児教育

期の子ども達における英語教育とは、まさに違う文化を知るきっかけと考えることから始めるとする方法もある。そのためにも、幼児教育と英語活動・英語教育とのかかわりの中で、ナショナルスタンダードの構築をまず考える必要がある。

今後の取り組み

英語活動が子どもにとっての取り組みとなることから、保護者の考えや捉え方に対してアンケート調査の必要性も浮き彫りになった。保護者側がこの英語活動・英語教育をどのように思い、感じているかは一人一人の子どもと英語の繋がりに大きな影響を与える。保護者に対する英語活動・英語教育に対するアンケート調査から見る幼児教育現場における英語活動・英語教育の今後に対しても注目し、幼児教育における英語活動の今後の潮流に対して調査を継続し、今後の方向性に対して注目していく。

参考・引用文献

- 1) 内閣府・文部科学省・厚生労働省「子ども・子育て関連3法案について」平成24年度全国保育士養成セミナー資料、平成24年7月
- 2) 「切り抜き速報 保育と幼児教育版 2009年3月」“幼稚園で英語「必修」のナゾ” 株式会社ニホン・ミック
- 3) 池中雅美「石川県内の幼稚園における英語活動の現状と英語活動の位置づけに関する一考察」『北陸学院短期大学紀要』第38号, 2006
- 4) 田中恭子・古茂田貴子「幼児期の英語教育について」『大阪城南女子短期大学研究紀要』第41巻, 2007
- 5) 福土洋子・成田恵子・坂本明裕「保育現場における英語活動の実態調査」『青森明の星短期大学研究紀要』第35号, 2009
- 6) 松永道子・小松義隆・ロバージュ, ルーク「コミュニケーション能力を高める幼児英語教育のこれから—幼稚園・保育園における英語教育の全国調査および先進園訪問を通して—」『長崎短期大学研究紀要』第21号, 2009
- 7) 秀真一郎「英語教育の低年齢化に関する一考察」吉備国際大学研究紀要（社会福祉学部）第21号 p81～91 平成23年3月
- 8) 秀真一郎・木本有香・中島眞吾・他「幼児教育現場における英語活動の実態—予備調査をもとに—」全国保育士養成協議会第51回研究大会 p142～143 平成24年9月